

## 伊勢原の民話紙芝居

# 『おとめ地蔵』を語る

監修：伊勢原市教育部社会教育課



渡部美幸さん



若林京子さん



酒井道子さん



 伊勢原の民話を紙芝居にしようと思ったのはどうしてですか？

**渡部**「伊勢原の古くから伝わっているお話を子どもたちや皆さんに知って欲しいと思いました」

**若林**「日向薬師や大山にまつわる言い伝えや昔話を知らない方も多くて、とても残念なことだと思っていました」

 以前から、民話を物語にしたいと思っていたのですか？

**若林**「私は絵本を作っているので、絵本の会ができて（1985年発足）、しばらくして、日向薬師や大山等の民話や話を知り、絵本にしようと考えました。その頃はインターネットもなくて、図書館や博物館の資料が主でしたが、古い民家には納屋に昔ながらの農具がおいてあり、旧家の蔵の中の道具などをスケッチをしたり、お年寄りに話を聞いたりして参考になる資料集めをしていました。比々多地区のお寺や旧跡を記録する会でも役立ちました。少しずつ長い時間をかけて物語のたまごを温めていた、という感じでした。絵本のあとがきに“構想20年余”と書いてあって、その頃のことを思い出しました」

 絵本でなく、今回は紙芝居を作られたんですね

**若林**「当時は、わたしも『おはなしばる〜ん』のメンバーだったので、「民話を紙芝居にしたら！」という思いもありました」



**I** 「おとめ地蔵」は伊勢原独自の物語なんですか？

**渡部** 「いいえ、実は同じような物語は全国にあって。「日招き伝説」として日本各地にあるんです。近くだと、小田原市や三浦市にも同じような物語があることが『神奈川県の民話と伝説』（※）という本の中にも記されています」

**I** 伊勢原市内に「乙女地蔵」が祀られていますね

**酒井** 「田んぼは無くなりましたが、近くのお寺の前に立っています」

**渡部** 「物語と同じ事が本当にそこであったというよりも、当時全国各所にあった伝承と、人々が豊作を願う気持ちからの象徴なのかもしれませんね」

**I** 紙芝居のなかで出てくる、五反田とはどのくらいの大きさなんですか？

**渡部** 「身近なもので例えると、小学校のプール15個分くらいの大きさだと思います」

**I** 『おとめ地蔵』の紙芝居の魅力はなんですか

**若林** 「物語の意外性と、沈んだ太陽を引き戻すというダイナミックな展開です」

**酒井** 「娘の祈りが通じて、太陽がぐっぐっと戻る場面」

**渡部** 「曼殊沙華のなかのおとめ地蔵はせつないけれど、優しい感じがでています」

**I** 作画を担当されて、何か苦労はありましたか

**若林** 「手作り絵本の『おとめ地蔵』は、すでに2007年に完成していたので、サイズの変更に苦労しました。30cm×80cmの横長の絵を26cm×38cmのほぼ四角形に変換するための構図と、どの場面を描くかという作業と、ページ選びです。絵本は自由にページを増やせますが、今回の紙芝居は12画面という制約がありました」

**I** 制約された画面で物語を表現しなければならないんですね。

**若林** 「それと風俗の細部。衣装もそうですが、神社の鳥居も、木でできているか石造りなのか、とか。色は朱？など迷うことばかりでした。沈んだ太陽が引き戻されるシーンをどう描こうかという事にも、苦労しました」





 絵師としてのこだわりはありましたか。

**若林**「太陽が沈んだ後の闇の深さです。紙芝居の原画ではこのシーンに、韓国紙に墨とアクリル絵の具の黒を重ねて濃い暗黒を表現しましたが、印刷してみたら、ごく普通の黒だったのでちょっと残念でした」

 太陽を呼び戻すとき画面と、娘の必死の祈りの声もとても印象的でした。

**渡部**「娘の祈りが神様に通じて奇跡が起きる、伝説としても見せ場といえるシーンですね」

 紙芝居を製作して嬉しかったことはありますか

**若林**「伝承文化に詳しい方々にさまざまなお話を聞かせていただき、たくさんのご助力を受けました。すでにお亡くなりの方も多いので、貴重な体験でした。また、平塚博物館からは数多くの資料提供をいただき、深く感謝しています」

**酒井**「この紙芝居をみて「伊勢原にこんな民話があるのを初めて知りました」と言ってくれた時に嬉しかったです」

 最後の質問になりますが、いままで、どんな場所で演じているのですか。また、紙芝居はどこで利用できますか？

**渡部**「小学校の朝読書の時間や、児童コミュニティー等でよく演じさせていただいています。今はコロナ禍でなかなかおはなし会が開けませんが、また落ち着いたら、いろいろな場所で行えればと思います」

**酒井**「紙芝居は伊勢原市立図書館で借りることができます。また、市内の保育園や小学校にも寄贈させていただきました」

 貴重なお話をありがとうございました。

※『神奈川県民話と伝説』1975年  
著者／萩坂 昇・出版社／有峰書店新社

